

## 学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	平野正徳
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	環情博甲第1915号
学位授与年月日	平成29年3月24日
学位授与の根拠	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 環境リスクマネジメント専攻
学位論文題目	オーラルケア意識と生活満足度の関係
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 大矢 勝 横浜国立大学 教授 中井 里史 横浜国立大学 教授 及川 敬貴 横浜国立大学 教授 松本 真哉 横浜国立大学 准教授 竹田 宜人

## 論文及び審査結果の要旨

本論文は、オーラルケアに関する消費者教育を推進するための一つのロジックを構築するための基礎研究として、オーラルケア意識や行動、生活者の全般的な意識・行動、及び生活満足度の相互の関連性について検討し、将来的に「オーラルケア意識・行動の活性化が生活の質を高める」という仮説を立てることができるか否かを検討することを目的としている。データ自体はライオン株式会社で実施された「オーラルケア及び生活に関する意識調査」で収集されたデータを用い、当該調査では行われなかった各種分析により、オーラルケア意識・行動とその他の要因との関連性を探るものである。論文は第1章で背景と目的、第2章で先行研究のまとめ、第3章でライオン株式会社で行われた調査の概要、第4章～第6章で各種解析の方法結果と考察、第7章で結論をまとめている。

第3章は本研究の元データに関する詳細を示しており、調査自体は首都圏在住の40～79歳の男女1249名を対象としたもので、歯や口に関する意識・態度に関する53項目、生活全般に対する意識・態度に関する80項目、その他口の健康感、身体健康感、生活満足度等についての個別質問を含んだアンケートを用いて実施されたものであることを述べている。

第4章ではオーラルケア意識・行動と生活意識・行動について検討しており、まず口腔に関する意識・態度項目の因子分析を行った。因子抽出の計算法としては主因子法、因子数の決定にはカイザー基準を用い、バリマックス回転法を採用した。複数の因子に関与する質問項目、読み違いの起こりやすい質問項目等を除去し、23項目の質問項目に絞った因子分析でF1:歯の不健康、F2:オーラルケア注力、F3:口内違和感、F4:人目を気にする、F5:歯が弱い自覚の5因子を得た。歯間ブラシ等の補助的清掃用具の使用がF2に相関性があることが確認できた。また生活に関する意識・態度項目の因子分析では33項目の質問項目に絞った因子分析により、F1:経済性、F2:積極性、F3:社交性、F4:健康意識、F5:前向き志向、F6:人目重視、F7:几帳面、F8:人との繋がり各因子を得た。そして補助的清掃用具の使用が不使用者に比して各因子においてポジティブであることが認められた。またオーラルケア注力因子で2層化した集団間でも、生活関連の各因子についてポジティブであることが確認された。

第5章では生活意識・行動と生活満足度について検討しており、生活満足度に特に関連する生活関連因子はF1:経済性であり、その他にF2:積極性とF4:健康意識も関与していることが分かった。

第6章ではオーラルケア意識・行動と生活満足度との関連について検討し、補助的清掃用具使用者は生活満足度が高い傾向にあることが確認された。歯の健康状態とオーラルケア注力の2尺度で全体を4分画し、生活満足度の平均値を比較したところ、歯の不調がありオーラルケア意識

の低い集団が、他の3集団に比して生活満足度が低い傾向が認められた。

しかし、第5章において生活満足度が経済的因子によって大きく左右されることが明らかになっているため、経済性因子の高得点集団、中位得点集団、低得点集団のそれぞれの集団内でのオーラルケア注力の層別生活満足度を比較するという、経済的因子の影響を取り除いた形で手法で検討した結果、いずれの集団においてもオーラルケア注力の高いグループの生活満足度の平均値がオーラルケア注力の低いグループの生活満足度平均値よりも高いことが明らかになった。そして、経済性以外の因子として、F4:健康意識、F3:社交性、F8:人との繋がり因子がオーラルケア意識に関連して生活満足度に影響するという構図が推察された。

以上のように、本論文はオーラルケア意識・行動について、生活満足度との関係で検証するという非常にユニークな視点からの研究であり一定の評価ができるが、論理的整合性やデータ解析及びその評価結果については各種条件を考慮したより詳細な記述が必要等の改善が求められた。特に、オーラルケア意識・行動と生活満足度との因果関係については、仮説の修正を含めた細心の注意を払った記述が必要であることが確認された。以上より最終提出原稿には指摘事項を修正することを前提として学位論文の成績を合格(B)と評価した。

試験については、平成28年7月29日18:00~19:30に総合研究棟S201A室にて最終試験を行った。まず、論文提出者が40分間、パワーポイントを使用しながら研究成果を説明し、その後50分間、審査委員及び出席者により質疑応答を行った。論文提出者は、研究背景、調査方法、オーラルケア意識・行動と生活意識・行動、生活意識・行動と生活満足度、オーラルケア意識・行動と生活満足度との関係について順次説明した。その後の質疑応答では、主に因子分析を用いた解析方法に関する内容と、全体を通しての論理性についての確認が行われた。その結果、因子分析による解析を行った事実は認められるが、質問項目を絞る手法とその妥当性、寄与率やバリマックス回転等の意味等について、その理解がやや不足していると判断された。また論理性についても、「AとBに関連性がある」と「AがBに影響する」の区別が明確になされていないこと等の問題点が指摘された。英語の学力については、投稿中の英語論文(筆頭著者)が掲載可になれば問題ないと判断された。現在投稿中の論文の審査結果が届いていないため、審査期間延長の手続きをとることがほぼ確定しているので、その間に博士論文の論理的整合性を高めて分析方法の詳細を補筆することを前提として、全審査委員の合意の上で、最終試験の成績を合格(B)とした。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。